

# 大河篇

## 映画文学人生論

- 096) 大河の一滴 監督：神山征二郎 原作：五木寛之  
097) 生きる 監督：黒澤明 原作：トルストイ  
『イワン・イリツチの死』  
098) 恍惚の人 監督：豊田四郎 原作：有吉佐和子  
099) おくりびと 監督：滝田洋二郎 原作：青木新門  
100) 檜山節考 監督：木下恵介 原作：深沢七郎

大河の流れは悠久の時の流れ

非凡な英雄の人生は大河ドラマになることもあ  
るが、所詮は大河の一滴にすぎない。平凡な人間  
が大河の一滴であることはいまでもない。

そのように考える五木寛之（八十歳）は百寺巡  
礼をはたしたというが、その心境に共鳴する気持  
は私にもある。次の五篇あるいは五本の作品にふ  
れ、その気持がつのつてきた。

神山征二郎 大河の一滴 五木寛之

黒澤明 生きる

イワン・イリツチの死 トルストイ

豊田四郎 恍惚の人 有吉佐和子

滝田洋二郎 おくりびと

納棺夫日記 青木新門

木下恵介 檜山節考 深沢七郎

大河の一滴にすぎないとはいえ、人間は複雑な  
生命体（あるいは生命現象）である。体内には約  
六十兆の細胞があり、脳細胞だけでも約百万個、  
そのひとつひとつに数十から数百個のミトコンド  
リアがあるというのが科学的にも証明できる事実  
だとすれば、大河の一滴も馬鹿にしたものではな  
いが、無限大と無限小の中間的存在の自由意志は  
たかが知れている。

その自由意志で自殺や他殺の軽挙妄動にはしる  
人間もいるが、大勢には影響がない。



## 大河篇

映画文学人生論

大河の流れは悠久の時の流れ。宇宙誕生は約一三七億年前、地球誕生は約四六億年前、人類誕生は約四百万年前と推定されている。滅亡の時期は不明だが、個体は必ず死ぬ。

「逝（ゆ）く者は斯（か）くの如きか。昼夜を舍（お）かず」と孔子は言った。生きとし生ける者はすべて死ぬ運命にある。みなこの川の流れのようなものだなあという意味である。

しかし、水が冷えれば氷になり、氷がとければ水に戻り、熱を加えていけば水蒸気になる。ヘラクレイトスが言ったように「万物は流転する」。かたちを変えて存在し続けているともいえる。何のために？

それはわからないが、『おくりびと』の納棺夫は生死（しやうじ）を雪でもなく、雨でもない、みぞれにたとえている。北国の詩人はみぞれを見て、死を連想する。生への執着がなくなり、死への恐怖が薄らぐ。安らかにすべてを許す気持ちになり、あらゆるものへの感謝の気持があふれでる。生死の中に仏あれば生死なし。仏の光を見た人を仏は絶対離さない。

その光を恍惚の老人は見る事ができなかったが、おりん婆さんは雪の降る日にお山で見た。蒸気河岸の先生は、臨終の際、「山へ」と夫人に言っただけだというが、光を見たのだろうか。

一滴の孤独百億冬銀河